

パーシヴァル・ローウェルは日本人と火星をどう見たか

涌井 隆

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

1. はじめに

パーシバル・ローウェル(Percival Lowell; 1855-1916) は今日では殆ど忘れられた存在になっているが、存命中はなかなかの有名な人物であった。彼を世に知らしめたのは肉眼による火星観測に基づいた火星説である。スキアパレリに始まりローウェルに至る火星説は、一般読者の想像力をかき立て、H. G. ウェルズの『宇宙戦争』(1898) のような火星人が来襲して地球人と戦争を起こすという科学フィクション作品を生み出すまでに至る。ローウェルの今日の名声は、この火星説にはほぼ全面的に依存しているが、他にも冥王星の存在を予言したことでも知られている。彼は海王星の摂動を説明するため海王星の外に未知の惑星を仮定し部下を雇って死ぬまで軌道計算を続けた。彼の死後 1930 年に彼の部下であるクライド・トンボー (Clyde Tombaugh; 1906-1997) が冥王星を発見した。Pluto という名はローウェルの頭文字を意識してつけられた。火星説と冥王星の予言以外に、1883 年から 10 年にわたって数回日本を訪れ、日本について数冊の著作を書いたことでも知られている。1888 年に出版された、『極東の魂』(The Soul of the Far East) はラフカディオ・ハーンを感激させ、彼が日本を訪れるきっかけを作ったと言われている(中崎:77)。本論では、パーシバル・ローウェルは日本と日本人をどう見たのか、彼の日本についての興味は天文学についての関心とどのような関係があるのか、について論じてみたい。

2. 財力

彼について真っ先に言及されるのが、ボストンの名家の出身であり、極めて裕福であったという事実である。しかし、裕福であったというだけでは十分ではない。一体、どの程度、裕福だったのか? David Strauss によると、ハーバードを卒業後父から 100,000 ドルを譲り受け投資し、1900 年の父の死までに 5 倍、死ぬまでの残りの 16 年間でさらに 4 倍の 200 万ドルにまで増やしたという (Strauss: 55)。1916 年の 200 万ドルは、www.measuringworth.com/uscompare/ の計算によると、GDP 比率で換算すれば 2007 年の 5.5 億ドルに匹敵する。今日世界長者番付で上位にいるビル・ゲイツやウォーレン・ Buffett の総資産は 500 億ドル以上と見られているので、その 1/100 ほどにあたる。この 1/100 とい

う比率は、当時のボストンの旧財閥であるローウェル家とニューヨークに基盤を持つ新興財閥であるヴァンダービルト家の間に存在した格差に符合するだろう。彼は社交界で彼ら新興財閥と接し、彼我の財力の差に羨望を感じつつも、自らの文化的教養に優越感と矜持を見出した。

しかし、彼は、フルタイムの実業家ではなかった。ローウェル家の事業と資産管理はWilliam Lowell Putnam (妹エリザベスの夫) に任せ、自分は父から譲り受けた資産を世界旅行や著作活動あるいは火星観測の片手間に運用して20倍に増やしたのである。家業は古くから南部にプランテーションを持つ綿糸紡績業であったが、自分の資産は新興産業である鉄道業や電話通信業などに投資した。株による積極的な運用を行いながら、1907年の金融危機をも乗り越えたのだから、投資家としての手腕は尋常ではなかった。実業家としての業績はローウェル天文台の運営がある。砂漠の未開地を買い、天文台を建設し、天文学者を雇い給料を払う、という実務を一人でこなした。

3. 日本との関係

ローウェルが日本を訪れることになった直接の原因は、ローウェル財団を通じてモース、フェノロサ、ビゲローなどと個人的なつながりがあったからだが、もともと旅行好きで、外国語の習得が速く、ギリシアローマ古典文学を読む一方で、天文学にも興味を持つという、幅広い教養を身につけていたという事実が根底にある。彼がハーバードを卒業する1870年代は大学教育の転換期であり、彼は古い教養教育を受けた最後の世代に属した。彼の場合、西洋古典、歴史、物理学、数学、天文学などを幅広く履修し学士号を取ることが出来た。文学的教養が重視された家庭に育ちながら、ハーバードの卒業論文は、「星雲説」についてであった。このような幅の広い教養と豊富な外国旅行の経験があったからなのだろうが、望遠鏡で火星の極冠を観察する行為を、地球の極地探検と比較していたのは興味深い (Strauss:60)。つまり、彼にとって地球の各地を旅行し、異文化に触れ観察することは、火星を望遠鏡で観察することと根本的な違いはなかった。フランス人や日本人は火星人と違って実際に会って交流することが出来る。火星人は火星に旅行しなければ出会えないが、ラプラス・カント星雲説によれば地球も火星も成り立ちは同じであるのだから、地球に人類がいるように、火星にも似たような生物が存在しても不思議ではないとローウェルは考えた。アメリカ東部の一般インテリはフランス語が出来ればコスモポリタンと考えたが、彼は西洋の外に出るだけでは満足できず、地球の外にまで関心を向けた。その根底には、宇宙はどこでも同じ法則によって支配されているという科学的信念があった。

当時のアメリカが諸外国の中でもとりわけ日本に強い関心を抱いていたのは間違いない。そもそも日本に開国を迫ったのはアメリカであり、万延元年の使節団はニューヨークで大歓迎を受け、1876年のフィラデルフィア万博では日本の工芸品が高い評価を与えられ、グリフィス (William Elliot Griffis) は *The Mikado's Emperor* (1876) の中で、南北戦争を経て工業化に向かうアメリカを開国して近代化を進める日本に重ね合わせていた。思想界においてはエマーソンやソーローが東洋哲学

に影響を受けていたことから察せられるように、キリスト教的一神教の世界観に違和感を持ち、仏教などに改宗する知識人も出始めていた。ローウェルの従兄弟であるビゲロー (William Sturgis Bigelow) はハーバードで医学を学んだのち、パリでパスツールに師事し、その後、フェノロサに付き添って日本を訪れ、日本美術に触れることによって、仏教に開眼した。彼はフェノロサと同様に三井寺に葬られている。モース (Edward Sylvester Morse) は東大で教鞭を取ったお雇い外国人として知られている。彼は、動物学、とくに腕足類が専門であったが、大森貝塚を発見するなど日本における考古学の発展にも寄与し、ダーウィンの進化論を日本に伝えたとされている。彼は *Japan Day by Day* という著作の序文で、ビゲローの手紙を紹介している。江ノ島の臨海実験場で腕足動物を研究するモースに、ビゲローは、何故地球の裏側に行って下等動物を研究しなければならないのか、その実態がよく知られていない日本人という高等動物がいるではないか、彼らについて記録を残す方が学術に貢献出来るのではないかと執筆を促した。(モース：21)。モースの *Japan Day by Day* はいかにも科学者の著作らしく、記述が即物客観的で、彼一流の挿絵 (スケッチ) であふれている。

4. 日本と日本人をどう見たか

ローウェルは日本と日本人を論じる際、欧米化されたエリートと一般庶民を区別した。数回の滞在において、彼が東京で交際した日本人は主に英語を自由に操れるエリート達だった。宮岡恒次郎、高嶺秀夫、増島六一郎、有賀長雄など皆留学経験を持ち、特に後にローウェル家と家族ぐるみの交際を続けた宮岡恒次郎は幼少のころから英語で教育を受けたので、純粹のバイリンガルに近かった。ローウェルは彼らエリート達を殆ど欧米人であると見なし、共感を示した。例えば、Atlantic Monthly の1890年11月号に”The Fate of a Japanese Reformer”と題した文章を寄せ、刺客の手によって倒れた森有礼に共感を示し、暗殺者の西野文太郎と彼を讃えるメディアを批判している (Lowell 4:692)。この記事のなかで注目し値するのは、殺された森に対比して、暗殺者の西野が”impersonal” (没個人的) であると論じている点である。森はアメリカに影響を受けた革新的な思想を持ち、公の場所で自分の責任において表明しているが、西野は刺客となって世に知られるまで無名であり、自分の思想をテロという形でしか表現出来なかった。このような匿名的存在である西野を肯定的に受け止める日本のメディアに対して違和感を露にしている。

ローウェルの著作にはこの”impersonality”という概念が頻出する。彼の書き手としての特徴は、その”impersonality”という概念で日本と日本人の全体を説明しようとし、強引な筆力で押し切ったところにある。しかし、”impersonality”という概念は明確に定義されているわけではない。*The Soul of the Far East* では”individuality”ということばも使われ、”impersonal”と厳格に区別されているわけでもない。”impersonality”というのは極めて曖昧な用語であるが、ローウェルによると次のような様々な性質を指している。

個性のなさ。自我の弱さ。個人より集団を重んじる傾向(社会主義)。仏教的(自我の消滅)。人間の一生で言えば子供と老人にふさわしい。独自の思想を持たず、輸入と模倣に徹する。

ローウェルによると自我の強弱と民族については、極東人が一番弱く西に行くほど強くなるという。自我の強い順番に並べると、アメリカ人、ヨーロッパ人、地中海人(Levant)、インド人、日本人の順になる (Lowell 3:15)。「没個性」と精神については次のような議論を展開する：物質が不滅のように魂も不滅である。そして魂が身体に宿るのが生命である。生前において、魂は没個性であり、死ぬとまた没個性に戻る。魂は生きている間においてのみ個性的である。子供と老人の自我は大人のそれより弱くなるから、日本人は大人のアメリカ人と比べて子供か老人に近い (Lowell 3:24)。日本人は芸術家であるが、科学者ではない。(Lowell 3: 7)。個人より集団が重視されると、個人の自発性と努力が損なわれ、社会主義から共産主義ひいては虚無主義に陥る危険性を孕んでいる(Lowell 3:18)。

以上、“individuality” と題された第一章を要約したが、*The Soul of the Far East* は全編にわたって、日本人没個性説を主張するために様々な例を挙げて論証している。例えば、日本人は誕生日を祝わず、数え年という奇妙な年齢の数え方をする。故に、日本人は個人を尊重しない。日本語では、頻繁に人称代名詞が省略される。故に、日本人は没個性的である、等々。このような議論は、日本人を見下しているようで今日では反感を買って終わりだろうし、当時も、B. H. チェンバレンなどは結論ありきの演繹的な議論で科学的ではないと批判していた (Strauss: 89)。しかし、彼の一見乱暴で断定的な日本人論も当時は読者に広く支持されていた。彼の思考法の根底に社会進化論があり、スペンサーのその思想は言論界において圧倒的な影響力を持っていた。ローウェルは「想像力」と題された最後の章で次のように書いている。

人間の個性(individuality)の分化は精神の発達の過程において、種の分化が有機生命の進化の過程において果たしたのと同じ役割を担っている。つまり、個性の分化の度合いは、偉大な精神の進化の歩みの中でその位置を示す尺度のようなものである。すべての生命は、有機的であろうが無機的であろうが、単純な同一性から複雑な多様性に進化する過程にある。その過程は、星雲であれ鰓脚類であれ（鰓脚類の方が星雲より複雑だろうが）同じである。(Lowell 3:195)

この議論は一見、進化論を徹底した科学主義のように読めるが、科学がドグマになってしまい、観察データを軽視する傾向を内包している。例えば、鰓脚類の進化が星雲の進化より複雑であるとは観察データを蓄積しなければ断定できないし、蓄積しても単純に比較できないはずなのにローウェルは筆にまかせてさらりと書いてしまう。日本人とアメリカ人は同じ人類であるとローウェルは認めている。

それだからこそアメリカで教育を受けた森有礼のようなエリートはアメリカ人と寸分違わないと認めることにやぶさかではない。しかし、東京と日本を歩き回って遭遇する日本人（自分の日本語が十分でないため十全に意志の疎通がはかれない日本人）は、個性が未分化であるから、精神の進化の過程において遅れていると考える。これは社会進化論の考え方で、ダーウィンやウォレスの進化論とは関係ない。

ローウェルは、様々な機会をとらえて、日本人が生まれつきの「芸術家」であり、「科学」とは無縁であると主張している（Lowell 3:112; Lowell 5:26）。伝統美術や工芸品を高く評価しているからそのような意見が出てきたのは間違いない。手先が器用であるとも書いている。彼のこのような主張を読むと、非科学的な主張であると感じざるを得ない。想像するに、ローウェルは他の場所で日本人を否定的に記述しているので、どこかで、持ち上げておく必要があると考えたのではあるまいか。しかし、「科学」を持ち上げている自分自身が、かなり非科学的な主張を行っているので、彼の日本人に対する賞賛も文字通りには受け取れない。

このようにローウェルの日本人論を概観すると、日本人を見下しているような口調が鼻について反感を感じる読者がいても不思議でないだろう。確かに、*The Soul of the Far East* や *Occult Japan* には、そのように受容されても無理からぬ言辞が散見される。しかし、能登半島への旅行記である *Noto* は、そのような日本人に対する否定的な断定が極めて少ない。おそらく、抽象的な議論をする場合、行き過ぎた決め付けに陥りがちなローウェルも、実際の人と人との交流においては、真実な常識人であり、人一倍好奇心が強く、人好きな人間だったということなのだろう。缶詰の練乳はまずいと言い切るが、日本のビールは旨いと褒めている。そう書く彼の頭の中には社会進化論は入り込む余地がない。日本であろうがアメリカであろうが見たもの経験したものについて率直な感想を述べているに過ぎない。たまたま劣悪な旅館に出くわすと、大げさに呆れてみせ、人力車や荷台を引く女性労働者を見ると、資本家階級らしく、抑制の効いた哀れみを感じるが、社会制度や国家を糾弾することはない。洋行帰りの知り合いの若者（日本人）が、日本にあつてアメリカにはない人力車を野蛮だと言っていたが彼がこれを見るとどう反応するだろうかと、他人に判断を転嫁する。同時に荷台を引く女の中にはまだ女性としての魅力を失っていない人もいと「男」としての本音もさらりと書いてしまう（Lowell 4:143）。ローウェルと庶民の日本人との交流は、暖かく微笑ましく正直である。*The Soul of the Far East* に見られる見下した口調がない。中崎によると、*The Soul of the Far East* に感銘を受けて日本渡航を決意したラフカディオ・ハーンは、上述したチェンバレンの批判を受け入れ、ローウェルの没個性論には否定的になって行くが、*Noto* は気に入っていた（中崎:79）。

5. ローウェルは火星と火星をどう見たか

上に論じた *Noto* と彼の火星についての著作には奇妙な共通点がある。*Mars and Its Canals* を例に取

ってみよう。この著作と能登への旅行記である *Noto* は、日本と火星を異質で未知な世界であるところとさら強調し、作者である自らをその未知なる世界への探検者と位置づけているという点でよく似ている。そのことは *Noto* の副題が “An unexplored corner of Japan” となっていることからでも容易に知られる。もちろん、能登はチョモランマでも南極点でもブラジルの熱帯雨林でもなく、東京から鉄道と馬車と人力車を乗り継いで到達出来るので秘境でもなんでもないから、単なる誇張である（とは言え、帰路での黒部峡谷歩きや天竜川下りは一步間違えれば命を落とす危険もあったのは確かであるが）。能登とは荒山峠を登りきったところで初めての対面を果たすのだが、平凡な田んぼの風景が広がっているだけで、思い描いていたものと全く違っている。それに、七尾市和倉温泉に着いて、自分がそこを訪れた最初の西洋人でないと知るにおよぶと失望を隠さない(Lowell 4: 103, 110)。 *Noto* の冒頭にはローウェルが能登旅行を思い立った理由が書かれている。地理学的、地質学的に調査に値するというのではなく、ただ、半島の形が興味深いのと、” noto” という地名の響きがいいと言うのだ。

東京で地図を見ていたら、深い湾といかづい形の半島が目にとまった。Noto という音の母音の色が気に入った。子音の形もいい。流れるような” n” ときりっとした” t” 。女らしさと意志の強さを感じた。(Lowell 4:1, 2)

このことから、モースの『日本その日その日』などとは全く趣向を異にした旅行記であることが容易に想像できる。モースの旅行記は即物的客観的な記述で埋められており、当時の風物風習を知る上での貴重な資料となっているが、ローウェルの *Noto* は、むしろ『ドンキホーテ』や『不思議の国のアリス』のように、想像の世界に迷い込んだ主人公が物語の中心になるフィクションと考えた方がよい。ローウェルが『ドンキホーテ』を意識していたのは、” knight-errant” （諸国遍歴の騎士）ということばが数回使われていることからわかる。新潟県の能生という漁港に一泊するのだが、その貧しさに唾然としながらも、女給の歓待に感激し夢見心地になる。その一連の描写は、田舎女の中にドゥルシネア姫を見て幻想に耽るドンキホーテを彷彿させる。(Lowell 4: 58)。ローウェル自らが、自分自身をドンキホーテ的な反英雄にしたてあげて、戯けているようにも読める。

次に、火星を論じた *Mars and Its Canals* に目を転ずると、*Noto* と酷似した書き出しを持っていることが分かる。ここでも主題は、冒険であり探検である。第一章の” exploration” と題された書き出しは次のようになっている：「太古の昔から、冒険の血を体に回らせて世界を歩き回る者の心を執拗に捉えたのは旅行であり冒険であった。見慣れた光景と顔に別れを告げ未知の世界に押し進んでいく行為は、勇気ある者を磁石の力で偉大な事業に導いた」(*Mars and Its Canals*: 3)。コロンバスによる新大陸発見に触れ、望遠鏡による火星観測を、大洋横断に例える。従来の固定観念からは想像も出来ない新事実が明るみになり、その観測データを科学的に解析することによって人類の知識が向上する。大洋横断が大きな困難を伴うように、望遠鏡による観測も容易ではない。街を離れ、高

地の砂漠で孤独な日々を強いられる、等々。ローウェルの文体は、ロンドン王立協会が奨励したような修辞を排した簡潔な文章には程遠く、想像力の飛翔と、高揚感に満ちている。自らの使命を火星を科学的に究明することと言明しているので *Noto* に見られる戯けやアイロニーを読み取ることは許されないが、どう見てもローウェルのこの文章は、科学論文のそれではない。ローウェルは自らを幾度となく科学者であると規定しているが、観測データを禁欲的に吟味し緻密な論理によって仮説を検証するというより、想像力の飛翔によって結論を先回りして出してしまう傾向が見え隠れする。観測データの記載も恣意的で一貫性がない。観測の日時、機材の詳細、空の透明度とシーイングなどの基本情報が欠けており、後世にデータを残すことの意義に自覚的だったとは言えない。彼にとっては、火星人が存在するという結論が重要なのであって、それに至るデータの詳細はどうでもよかったのかもしれない。

ローウェルは火星に高度な文明を持った生物が存在すると結論付けた。その主張は反証不可能(少なくとも彼の存命中には)なので科学的命題とは言えないかもしれないが、推論の筋道は明解である。まず、彼はスキアパレッリの運河説を受け入れる。さらに、その運河の筋がしばしば直線に近く二重になっていることから、人工的なものであると推論する。一方、極冠に注目し、それが季節によって拡大したり縮小したりするので、氷の生成と解凍であると断定する(水の存在は分光器を使つてのスペクトル観測で明らかになっていた)。火星の運河は極冠の水を灌漑するために、高度な知能を持った生物が建設したはずだ。色の濃い部分はオアシスと考えられ、運河がオアシスを連結していることから水を運んでいることが推察できる。オアシスには食物となる植物が生えているが、植物が存在するという事はそれを食する動物が存在するはずである、等々 (*Mars and its Canals*: 348-384)。他にも、Strauss によると、ローウェルは、火星の砂漠をアリゾナの砂漠になぞらえ、火星の文明は産業発展を続ける当時のアメリカより進んでおり、MIT の教授陣のような官僚エリートが合理的かつ能率的な支配運営を行っていると考えていたらしい(Strauss: 61)。

6. ローウェルの思想と思考形式

上に見てきたように、ローウェルの著作には根拠のない断定と決め付けが散見される。火星人説がその最たるものであろうし、日本人が没個性的であるというのも該当する。アングロサクソン種が日本種(女種とフランス種も)より進化している主張したり (Lowell 5: 283)、神道は哲学と言えず、日本人は哲学者ではなく、芸術家であると決めつけたり (Lowell 5: 26)、極東人にとって結婚は人生でもっとも重要な商取引であると断定したり (Lowell 3: 57)、一世紀前のアメリカの読者層にはそれほど違和感がなく受け入れられたかもしれないこれらの主張も 21 世紀の国際化された今日では異様に聞こえる。一体、ローウェルの思想をどう考えればいいのかのだろうか。

まず、彼は自らが属する階級と時代の制約を受けていた、とひとまず言える。彼の祖先は南

部の綿糸業で財を成したので、一家の富は奴隷労働力の搾取に由来する。黒人に対する彼の考えははっきりしないが、彼の社会主義に対する感想から類推すると、労働者階級は基本的に怠け者で自発性もないので、優秀な資本家階級が正しく管理して体制を維持しなければ人類の進歩はないと考えていたことは想像に難くない。このような温情主義は、当時、いわゆる先進国のエリート達に広く受け入れられていた。そのことは、国際連盟憲章の第22条を読めばわかる。その条項は自立できない植民地と信託統治を行う先進国の関係を明記しており、後者の優位・先進性が自明視されている。もちろん、そのようなことは遅れて近代化した日本のエリートにも自明であったが、彼らの多くは、日本の国力が発展途上であっても日本人が「種」として西洋人に劣っているとは考えなかった。ローウェルについては、日本人が「種」として劣っていると考えていたらしいことが日本のエリート達と異なっている。

このようなローウェルの思想は彼自身がしばしば言及しているように、ハーバート・スペンサーの社会進化論に由来する。この考えはダーウィン・ウォレスの進化論を社会と「人種」に応用したもので、彼の存命中には圧倒的な影響力を持っていたが、今日では思想史の片隅に名を留めているに過ぎない。その理由は、数十億年の生物の進化を扱った理論を、せいぜい数千年の人類文明の歴史に適用しようとしたことにある。分子生物学の進展によって、ダーウィン・ウォレスの進化論はより強固な科学理論として圧倒的に支持されているが、スペンサーの社会進化論は、思想史の中で末席を占めているだけだ。

21世紀の今日の視点から、ローウェルやスペンサーを批判することは容易いが、注意すべきは、人種的偏見は今日でも根深いという事実である。DNAの構造を明かにした研究でノーベル賞を受賞したジェームズ・ワトソン (James Watson) は2007年に、アフリカが経済的に停滞している原因の一つは、アフリカ人のIQが低いからであると主張して物議をかもした。ワトソン自身後にその発言を撤回したが、メディアを通じてスキャンダルに発展した。分子生物学の大家ならそのような偏見から自由であるはずだ、という思い込みは脆くも崩れ去り、科学的真理と人種偏見は異なる次元の現象であるかのような印象を残した。一世紀前に生きたローウェルの隠れた人種主義を今日批判するのは意味がない。ワトソンという事例を究明する方が今日では重要な課題になる。

7. 火星その後

火星の運河の存在はローウェルの存命中においても天文学者たちに広く受け入れられていたわけではなかった。ローウェルは1907年に火星の写真撮影を行ったが、決定的な証拠をもたらさなかった。ローウェルと彼のスタッフが運河の存在を主張しても、印画紙に写る運河の筋ははっきりせず、第三者の専門家がネガを調査したが、運河にあたるものは見当たらなかった (Crowe: 528)。ウィルソン天文台の60インチ反射望遠鏡による1909年の眼視と写真による観測においても、運河は確認出来なかつ

た (Strauss: 230)。しかしながら、独立した第三者が異論を唱えても、当時の写真技術の水準は低く、眼視観測の食い違いに決定的な決着をつける決め手は存在しなかった。驚くべきことだが、実際のところ、1960年代のマリナー探査機によるフライバイ撮影で火星表面の詳細な写真が手に入るまで、火星の運河説を覆す決定的な証拠は存在せず、1956年の大接近の前年には、*There is life on Mars* と題した書物が刊行されるほどで、ローウェル流の運河のスケッチは広く流布していたのだ (“Sky and Telescope” : 30)。ローウェルの後継者であるローウェル天文台の Earl Slipher も 1956年の時点で火星の存在はともあれ、運河の存在は信じて疑わなかった。

ローウェルが見た運河は一体何だったのだろうか？2003年7月23日付けの、William Sheehan による “Sky and Telescope” 掲載記事 “Venus Spokes: An Explanation at Last?” は、ローウェルが金星の表面にもスポーク状の筋を見ているところから、水晶体の混濁である飛蚊症と網膜上の血管の影が合わさって筋状の模様に見えたのではないかと推察している。驚くべきことだが、ローウェルは有効口径24インチを3インチにまで絞って観測していたらしい。そこまで絞ると射出瞳が極めて細くなり、そのような幻覚が生じやすくなるのだと言う。3インチというと8センチにも足りない。莫大な資金を投じて天文台を作ったのに、子供並の口径で観測していたというのはにわかには信じがたいが、何よりも、24インチを3インチに絞ることによって分解能が1/10に低下してしまうことをローウェルはどう考えていたのだろうか？この小論を書いている私は、2003年の大接近の際、30センチや40センチのニュートン式望遠鏡で火星を肉眼観察したが、ついに運河をとらえることが出来なかった。しかし、解像度はハブル望遠鏡と比較にならないが、色や模様の概要はハブル望遠鏡の画像通りに見えたので、私の観察が正しく、ローウェルはおそらく幻覚を見ていたのだらうと確信している。

カール・セーガン (Carl Sagan) は *The Demon-haunted World* の中で、20世紀前半には火星人と遭遇したという主張する人が少なくなかったが、60年代のマリナーやバイキング以降激減したと述べている (Sagan: 111)。確かに、地球外生物の目撃証言の内容が時代の科学常識に左右されるというのは奇妙である。今日でも ET に誘拐された等の報告が絶えないが、要するに、ET と言っておけば、宇宙は広いので反証不可能であるということになる。20世紀前半はたまたま火星の存在が真面目に論じられ、半信半疑で信じていた人も少なくなかったので、宇宙人ではなくさらに限定して火星人と主張する人が出てきたのであろう。

8. おわりに

パーシヴァル・ローウェルは自然科学の担い手がアマチュアから大学に所属する専門集団に移行しつつある時期に活躍した。彼はローウェル財閥の資金を背景に、一般アマチュアが羨む環境を自前で用意することができた。しかし、彼の科学者としての業績は今日では全く顧みられない。科学は世界の記述の総体であるので、真でない記述は淘汰され教科書から抜け落ちていく。振り返ると、彼の科学

的業績は一般読者の注目を集めこそすれ、科学者集団からは一度もまじめに取り上げられたことがなかったというのがより正確なのかもしれない。火星の運河説にせよ火星人説にせよ、独立した第三者による追観測が同一の結論に達したということはなく、それでも一般読者に受け入れられたのは、決定的な反証の不在と、彼の流麗な文体に助けられたからだろう。日本についての著作においても、火星人説と類似した先に結論ありきの強引な論証が見られる。それを裏付けする理論が、社会進化論という今日では廃棄された思想であるので、彼の著作は、思想史の片隅に埋もれてしまっている。ただ、*Noto* など旅行記はその文学的価値のゆえに今日でもその魅力を失っていない。

参考文献

- 小泉凡 「パーシヴァル・ローウェルのラフカディオ・ハーン宛書簡に関する考察および邦訳」 コレクション・ジャパノロジスト パーシバル・ローウェル著作および書簡集 別冊付録 エディションシナプス 2006
- 小泉凡 「パーシヴァル・ローウェルの新書簡に関する考察」 島根女子短期大学紀要 vol. 38, 51-61, 2000
- 中崎昌雄 「森 鷗外「與謝野晶子さんに就いて」と火星学者パーシバル・ローエル」 中京大学教養論叢 31(3), 1490-1395, 19910225
- モース 『日本その日その日』 石川欣一訳 平凡社
- Crowe, Michael J. *The Extraterrestrial Life Debate, 1750-1900*, Dover Publications, Inc. New York, 1999
- Lowell, Percival *Mars and Its Canals*, New York: Macmillan Company, 1911
- Lowell, Percival *Collected Writings on Japan and Asia, including Letters to Amy Lowell and Lafcadio Hearn* Series 'Collected Writings of Japanologists' Volume 1, 2, 3, 4, 5 Edited by David Strauss, Edition Synapse, Tokyo, 2006
- Sagan, Carl *The Demon-haunted World* Ballantine Books, 1997
- Strauss, David *Percival Lowell The Culture and Science of a Boston Brahmin*, Harvard University Press, Cambridge MA. 2001
- “Sky and Telescope” July, August 2003
- <http://www.daviddarling.info/encyclopedia/S/Schiaparelli.html>
- <http://www.skyandtelescope.com/news/3306251.html?page=1&c=y>